

氏名	津村 麻紀
学位の種類	博士 (カウンセリング科学)
学位記番号	博甲第 8422 号
学位授与年月	平成 30年 2月 28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	『日本の総合病院のがん医療における心理職の活動モデルに関する研究』

主査	筑波大学教授	博士 (心理学)	大川 一郎
副査	筑波大学教授	博士 (人文科学)	安藤 智子
副査	筑波大学教授	博士 (心理学)	藤生 英行
副査	目白大学教授	博士 (医学)	小池 眞規子

論文の内容の要旨

津村麻紀氏の論文は、日本の総合病院の心理職のがん医療における活動実態を明らかにし、心理職の臨床現場における活動モデルを構築し、心理職が自ら活用できる活動モデルの自己評価のためのチェックシートを開発することを目的としている。その要旨は以下の通りである。

論文は三部構成であり、文献研究であるⅠ部の第1章で、著者はがん医療における心理的活動をめぐる諸問題について述べている。第2章ではがん医療における心理職の活動に関する先行研究を概観し、第3章では用語の定義、第4章で先述した研究目的と研究の意義について述べている。

Ⅱ部は実証的研究であり、第5章の研究1から第8章の研究4までのがん医療における心理職の活動モデル構築のための研究と、第9章のがん医療における心理職の活動モデルの提案およびチェックシートの開発(研究5)が著者により行われている。

著者は、研究1ではインタビュー調査と質問紙調査による心理職による心理的支援の活動の実態を、研究2では「がん医療における心理職の活動モデルに関する研究－アクション・リサーチ」として3年間にわたるアクション・リサーチのプロセスを明らかにし、総合病院のがん医療における心理職の活動モデルを構築した。具体的には、活動モデルは5つの心理職の機能(精神医療従事者の機能、サイコオンコロジストの機能、臨床心理学の専門家の機能、リエゾンサイコロジストの機能、アントレプレナー的機能)と4つの活動ステージ(第1ステージ: ニーズアセスメント、第2ステージ: 関係基盤の構築、第3ステージ: 連携協働体制の構築、第4ステージ: 臨床心理学的介入)の関係からなる。この活動モデルのロジックモデルとして、即自的には依頼者のサポートを目的としながらも、中長期的には身体医療の現場ひいては病院全体に心理療法文化を根付かせ、医療従事者が心理的ケアができるようになることをアウトカムとして想定するモデルが著者により構築された。著者は研究3で「がん医療における心理職の活動モデルに関する研究－その課題－」として活動の依頼者と提供者の双方の視点から、研究2で構築された活動モデルを評価し、課題についての検討を行った。研究4で「がん医療における心理職の活動モデルに関する研究－その解決方略－」として、熟達した心理職の課題解決の方略を調査し、活動モデルの再構築を行った。活動モデルの課題としては初心の心理職を想定した分かりやすさの不足、チーム医療の視点の不足が挙げられ、解決方略としてモデルに具体性を持たせることと多職種との関係の明確化を示す必要性が考えられた。そこで、著者はロジックモデルを見直して具体的な項目例や活動目標をモデルに追加した。第9章では、これらの4つの研究を受けて、心理職が自発的に行っている活動と今後行ってい

きたい活動のデータを参考にモデルを修正した。最終的に、ケースに応じてステージや機能を柔軟に行きつ戻りつすることのできる循環型のモデル図を作成して、これを Mental PsyCLE モデルと命名した。また、著者はこのモデルを元にした自己評価のためのチェックシートを開発し、初心の心理職向けの自己振り返りと教育支援のツールとして提案した。

Ⅲ部は総合的考察で、著者は、心理職が各臨床現場で個別に行っている複雑な活動内容や機能を明らかにすることで、現場で脈々と受け継がれてきた臨床知を客観的にモデル化したこと、具体的な活動目標として初心の心理職に提示しうる教育的な意味を持ったモデルを提示できたことを研究上の意義として指摘した。

審査の結果の要旨

(批評)

著者は日本の総合病院の心理職のがん医療における活動に焦点をあて、その活動の実態を明らかにし、心理職の臨床現場における活動モデルを構築し、心理職が自ら活用できる活動モデルの自己評価のためのチェックシートを開発している。これまで焦点を当てられることの少なかった総合病院の心理職に焦点を当て各臨床現場で個別に行っている複雑な活動内容や機能を明らかにしたこと、具体的な活動目標として初心の心理職に提示しうる教育的な意味を持った客観的なモデルを提示できたこと、また、実践現場の中で、初心の心理職においてもすぐに活用できる評価のためのチェックシートを開発したことなど、これらの成果は、この領域の心理職がさらに今後活躍するために大きく貢献するものである。

本研究の限界と課題として、臨床での心理職の活動要素を全て含有したモデルとするには限界があり、ケースバイケースで構成される実際の心理臨床のダイナミクスを描き切れていない面があること、実証研究にまでは至らず客観性やモデルの一般性が十分でないことなどの課題が残った。

これらの限界はあるものの、平成29年12月22日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(カウンセリング科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。